

西日本新聞 2001年11月6日

九州派の「切り込み隊長」

石橋泰幸さんを悼む

黒田雷児（福岡アジア美術館学芸員）

「タイコーさん」と呼ばれ親しまれてきた石橋泰幸は、一九五六年から桜井孝身やオチ・オサムと行動を共にし、翌年の「九州派」結成に参加、六八年の最後の展覧会まで、一度も離脱することなく九州派につきあった、最も律儀なメンバーであった。一九八八年に福岡市美術館での「九州派展」を契機に九州派当時の作品を捜したが、数点の小品しか現存していなかった。グループ創生期での石橋の貢献は、失われた作品の写真や証言から推測するしかない。

コールタール(のちアスファルト)をぶちまけて円のポリウムと動感が周囲にエネルギーを発散する。あるいは、田舎くさいムシロに絵をかく。単純だが破格の発想、やんちゃ坊主的な明るい俗っぽさ——桜井孝身が石橋を評価したのも、このような石橋の作風とキャラクターが他のメンバーにも突破口を考える可能性を認めていたからだろう。いわば鉄砲玉、切り込み隊長の役割である。

一九六〇年以後の九州派は、工業生産物のオブジェやハプニングに移行していく。石橋もグロテスクなオブジェを試みたが、その主眼はあくまで素材や造影の実験であった。そのポップ・アートの作品も、現代社会へのコメントというよりは、あっけらかんとした色面抽象と同様、徹底して単純明快な造形の追求から生まれたものだろう。そこには九州派につきまとった屈折した政治性が希薄なのである。いわば、激変した六〇年代美術の中でも、自分自身の資質にも律儀な作家であった。八〇年代には日韓現代絵画展への参加から、韓国特有のモノクローム絵画に接近して素材の固有色を生かした作品を展開したのも、同じ資質によるものだった。

しかし、その単純明快さへの志向と技法的な実験の性急さが、画家としての成熟を妨げた面もある。いやむしろ、成熟を最後まで拒否したというべきか。つい数年前にお会いしたときも、帽子の下の目をぎよろつかせて、「具象絵画を描けば売れると言われるのだけど、僕は抽象だからね」と言って、おそらく四十年間変わらない無邪気さで実験への意欲を見せていた。生活のために筆を折ることも、穏健な作風への退行も拒否し、しかも「九州派伝説」を利用しようという野心もなかった。「九州派」の全過程を知る証人の死は惜しまれてならないが、むしろ、歴史に名を残す運動体が、天才とはいえない作家による自らの資質に対する生涯をかけた律儀さによっても支えられていたことを忘れてはならないだろう。

十月三十一日の葬儀。出棺のときの息子さんのあいさつが心にしみる。「父はこれから世界一大

